

脳が互いに花を手向けることで、戦争の歴史に区切りがついたと思う」と水を向けると、コール氏も「(両首脳の献花は)適切な判断だったと思う」と応じました。

「相互献花外交」——それは日米両国の真の和解のため、私がジャーナリストとしての後半生をかけて訴え続けてきたことでした。日本人は広島・長崎への原爆投下や無差別爆撃、アメリカ人はパールハーバーの記憶を忘れず、それぞれがわだかまりを抱いている。そこで和解と鎮魂のための儀式として、日米両政府の首脳が互いに花を手向けて犠牲者を悼むことはできないか。私がこの「相互献花外交」というアイディアを思いついたのは、先ほどのコール氏の言葉がきっかけでした。

彼は一九四二年四月十八日、東京初空襲を行った「ドゥーリットル爆撃隊」八十人の最後の生き残りです。

コール氏は、いまでは数が少なくなった「太平洋戦争の最後の英雄」の一人です。アメリカでは士官クラスの高齢というのに、あちこちから引っぱりだこ。からだは元気ですから、全米各地の軍関係の催しに顔を出しては、拍手喝采を浴びています。

今年七月二日には、ドナルド・ト

トランプ大統領からの電話

ランプ大統領がコール氏に電話したことを、ホワイトハウスが発表しました。その電話で大統領は、コール氏が転倒事故で骨折をしたことへの見舞いとともに、日本の真珠湾攻撃と緒戦の勝利で落ち込んでいたアメリカ世論を、わずか四カ月後に東京など主要都市への初空襲の成功で元気づけた、その勇気とアメリカへの貢献を称賛し、「九月の百二歳の誕生日までには完治しているよう祈っている」と激励しました。

そんな太平洋戦争の英雄と私の数奇な縁のはじまりは、その東京初空襲があった日でした。

当時八歳だった私は、通っていた戸山国民学校(現在の新宿区立戸山小学校)の校庭で、地上すれすれを左から右へ、新宿駅方向に横切る大きな双発の爆撃機に遭遇しました。その距離、およそ五百メートル。そのとき操縦席の手前側、進行方向の

ドゥーリットル爆撃隊
(コール氏提供、
右から2人目が本人)

日本初空襲を挫いたB25(同)

広島・真珠湾献花を 導いたパイロット

松尾文夫

ジャーナリスト

東京初空襲の日、私は彼を目撃していた

今年3月に再会(筆者提供)

安倍首相の真珠湾訪問から約三カ月後の今年三月下旬。私はあるアメリカの元軍人と再会するため、渡米しました。

太平洋戦争中、爆撃機のパイロットだった彼が暮らすのは、テキサス州サンアントニオ。米軍基地が集まり、軍関係者や退役軍人の多いこの町の郊外に、彼の自宅があります。のどかな田舎にたたずむ古い一軒家は決して立派ではありませんが、敷

地は広々として、かつては菜園の手入れを楽しんでいたこともあったそうです。

今年で百二歳になるその元空軍中佐、リチャード・コール氏は、いまでも一人暮らし。耳はめっきり遠くなり、会話をするには長女の助けが必要ですが、食欲は旺盛で、いたって健康体でした。ただ、十二年ぶりに足を踏み入れた彼の家の中のような、以前よりいくらか荒れてしま

ったようでした。

コール氏は開口一番、五年前に亡くなった私の妻への哀悼の言葉をかけてくれました。そういえば、初めて会ったときも、彼の第一声は「空襲で怪我をしなかったか」。いずれも、彼の人柄がにじみ出るような言葉でした。

私たちは、B25のレプリカなどが飾られた居間で、コール氏の長女を交えて話をしました。私が「日米首

右側に座っていた乗組員の顔がはっきりと見えました。白い顔に、高く大きな鼻。その輪郭は私の脳裏に焼き付きました。この爆撃機は、早稲田に爆弾を落とした直後でした。

後年、戦史作家である半藤一利氏が本誌二〇〇二年五月号に発表した「4・18 東京初空襲 あゝの爆撃機は？」と題するレポートを読んで、その鼻の持ち主がドゥーリットル隊長機の副操縦士であったコール中尉だと突き止めました。このことを著書に記したところ、長年の友人であった故・小林陽太郎氏（元経済同友会代表幹事）が、戦後に極東空軍司令部訓練部長として東京に赴任していたころのコール氏と知り合いで、彼を紹介してくれたのです。

こうして、いまから十二年前の二〇〇五年四月、テキサスの自宅でコール氏と初めての対面を果たし、本誌二〇〇五年八月号に「東京空襲

敵操縦士と和解の日」と題したレポートを寄稿しました。

当時、コール氏が語ったところによると、当初の計画では、日本本土爆撃予定日は四月十九日。日本時間の夕方に進入して、東京、横浜、名古屋、神戸、大阪の五都市を爆撃後、夜間に鹿児島県屋久島上空を通過して中国へ向かう。朝になったところで、浙江省の衢州（こうしゅう）およびその周辺の中国側飛行場に着陸、当時日本軍と戦っていた蒋介石軍にB25を引き渡すという野心的な作戦だったそうです。

コール氏が乗っていた隊長機の役割は、夕暮れ時の東京の中心部に焼夷弾で火災を起こさせ、後続機に道しるべを与えること。爆撃する場所はどこでも良かったものの、皇居への爆撃は全機に対して固く禁じられていたといえます。

しかし十六日の早朝、日本海軍の

監視船第二十三日東丸に、B25を搭載した空母が発見されたため、当初の計画よりも三百二十キロも手前で発進、昼間の爆撃となりました。コール氏は当時の心境を、こう振り返りました。

「最大の問題は燃料がいつまでもつか、中国大陸にたどりつけるのかということだった。日本の緑が美しく、清潔な国だという印象を持った以外、地上の記憶はあまりない。日本の戦闘機とは一回も交戦せず、遥か高いところを飛ぶ日本軍機を三十九機まで数えたことを覚えているだけだ。幸い屋久島を過ぎるころから中国大陸で低気圧が発生したおかげで本来の偏西風が追い風の東風に変わり、かろうじて中国本土までたどり着くことができた。この『カミカゼ』がなければ、巨大な鯨が泳いでいるのが見えた海上に不時着せざるを得なかった。多分、日本軍に捕ま

る前に鯨にやられていただろう」

このとき、私はコール氏から、相互敵花外交のアイディアへと発展する大きなヒントをもらいました。私が「ジョージ・ブッシュ大統領が広島を訪れ、平和記念公園で花を手向けてもらうのはどうだろうか」と話したところ、コール氏はやや呆氣にとられた様子でしたが、一瞬考えてからこう答えました。

「そうした考えをポール・ティベツ（原爆を投下したエノラ・ゲイ号の機長）と今度会ったら話してみる。

彼は私と同年だ。彼がどう思うかが大事だ。彼も私も仕事として戦争をしたのだから」

そして、こう続けたのです。

「日本側も大統領の花束と同じことをしないと、本当の和解はできないのではないか」

双方が互いに死者を悼まなければ、真の和解はない——帰国してか

らも、コール氏の言葉はいつまでも私の中に残りました。

大使と二時間の面談

帰国してしばらくしたころ、私は米ウォールストリート・ジャーナル紙から戦後六十一年の記念寄稿を頼まれました。私はニクソン政権時代の一九七一年に米中の和解を予測する論文を発表したことで、アメリカの友人たちから敬意を払ってもらっていたのです。

このとき私の念頭にあったのはコール氏の言葉と、一九九五年にドイツ・ドレスデンで開かれた和解の式典のことでした。かつて米英連合軍による無差別爆撃が行われたドレスデンでは、戦後五十一年の節目に追悼式が開かれ、イギリスからエリザベス女王の名代であるケント公や前国防幕僚長、アメリカから米軍制服組

トップの統合参謀本部議長らが参列しています。私は当時、この式典の模様をニュース番組で見て、大きな衝撃を受けたのです。

私は寄稿の中でこう綴りました。

〈ドレスデンの先例に学び、死者の哀悼と恒久的な和解のため、ブッシュ大統領が広島平和祈念館に花を手向けることを提案したい。アメリカの大統領が、世界で初めて核爆弾による犠牲者を出した象徴的な場所です。死者への敬意を示すことで、（日本国民の）心の棘はきつと抜けるだろう。（中略）その返礼として、日本の首相は適切な機会にパールハーバーに献花するべきだ〉（二〇〇五年八月十六日付、本文は英文）

この寄稿は、同紙の論説主幹のコラムが載るスペースを譲ってもらったことで掲載されました。

編集者は、私の原稿に「東京もドレスデンの和解を求めている」とタ

イトルを付けました。多くのアメリカ人には「ドレスデンの和解」で通じるのだ——そこに、日本とドイツの差を痛感したものです。

この寄稿の反響は大きく、レーガン時代に付き合っていた故・ラリー・スピークス元大統領報道官代行からわざわざ自宅に「大賛成だ」と電話が入りました。さらに、この寄稿がブッシュ大統領の親友でもあり、この年の四月に駐日アメリカ大使に着任していたジョン・シーファー氏との縁をもたらししてくれたのです。「こんな寄稿をした松尾という日本人がいる」

こう言ってシーファー氏に私を紹介してくれたのは、彼と大学の同級生だったダウ・ジョーンズ社の女性幹部でした。彼女は、ピューリッツァー賞の受賞歴もあり、同社が発行するウォールストリート・ジャーナル紙のスター記者でもありました。

このこともあって、シーファー大使は自信を持っていたのかもしれない。二〇〇九年、大使離任の送別会で、彼は私と二人きりになるタイミングをわざわざ見計らってこう言いました。

「あなたの提案は間違いなく後任の大使に引き継ぐ。待っていてくれ」彼は、保守層に支持基盤を持つ共和党のブッシュ政権より、民主党のオバマ政権のほうが実現の可能性が高いと考えていたようです。

シーファー氏の言葉通り、後任のジョン・ルース大使は着任早々、私に電話をかけてきました。そこで私は再び大使館に向き、彼もまた熱心に私の話に耳を傾けてくれました。

オバマ大統領に任命されたルース大使は、オバマ氏の選挙資金集めに功があり、信頼も厚い人でした。彼の大きな功績は、二〇一〇年八月六

ダウ社は、私がかつて社長を務めた共同通信マーケティングのパートナー企業で、私と彼女とはそのころから馬が合っていたのです。

赤坂の大使館にある大使の執務室で行われた面会は、二時間近くに及びました。彼はドレスデンでの儀式や相互献花の必要性を説く私の話を真剣に聞いてくれ、「よくわかった。やってみます」と応じました。

結果的に、彼の在任中に大統領が広島を訪れることはありませんでしたが、その代わり二〇〇八年九月、広島でのG8下院議長会議の際にナシ・ペロシ下院議長の原爆慰霊碑への献花が実現しました。

ペロシ氏は当時、下院の多数を占めていた民主党の議長で、大統領継承権第二位。これまで広島を訪れた現役のアメリカ政府、議会の高官としては最高位でした。広島訪問に先立ち、ホワイトハウスの了解をとり

日の広島平和記念式典に出席したことです。アメリカ政府を代表する大使としては初めてのことでした。

こうして二〇一六年、ついにオバマ大統領の広島訪問と献花が実現することとなったのです。これは私だけの主張が実を結んだものではありません。河野議長、故・若宮朝日新聞論説主幹、二人のアメリカ元大使や、二〇一三年に離任したルース氏の後任であるキャロライン・ケネディ大使の粘り強い努力をはじめ、多くの関係者の尽力と、さまざまな分野の方々の賛同により、実現したのだと感じています。

今年五月の日本記者クラブ賞受賞にあたり、私はシーファー氏から一通のメールを受け取りました。かつて私がシーファー氏の執務室で熱弁をふるってから十二年が経過し、互いの連絡先も分からなくなっていたところ、国際報道に関わる知人が仲

つけたうえで会議出席と献花でした。これには、シーファー大使の働きかけもあったのではと想像しています。

このペロシ議長の献花を実現させたもう一人のキーパーソンは、広島での会議開催を仕掛けた当時の衆議院議長、河野洋平氏でした。私は、河野氏と関係の深かった朝日新聞の故・若宮啓文論説主幹に連れられて議長公邸に足を運び、相互献花の意義を説明する機会も得ました。

河野議長はこの年の十二月、引退前の最後の公務として真珠湾のアリゾナ記念館を訪れ、献花しました。画期的だったのは、河野氏がこの訪問と献花を、ペロシ議長の広島訪問と献花、平和記念資料館への視察への「返礼」とはつきり位置づけたことです。これが、のちの日米両首脳による相互献花の実現につながる大きな布石となったと思います。

介してくれたのです。

彼からのメールには、「あなたの誠意ある訴えかけは、とても印象的だった」とあり、十年以上も前のことを克明に覚えていてくれたのです。ルース氏からも同様の祝電をもらいました。

潮目を変えたトランプ勝利

オバマ大統領は国内から出るであろう批判を恐れず、広島を訪問し献花してくれました。しかしこのとき日本の安倍首相が真珠湾を訪問する確約はありませんでした。それどころか、オバマ大統領が広島を訪問した時点では、日本政府関係者は安倍首相の真珠湾訪問について否定的な見方をしていたのです。

日米双方の心の棘を抜くためには、日本側の返礼がどうしても必要です。安倍首相にとっては、日本が

かつての対戦国と和解できる国だと示すための大きなチャンスでもありました。にもかかわらず、外務省は「オバマ大統領の広島訪問は、安倍首相の真珠湾訪問とは別問題」という姿勢を崩さなかった。相互献花を訴える私に対する政府関係者の反応は、いつも冷ややかだったのを覚えています。

潮目が変わったきっかけは、実はドナルド・トランプ氏の大統領選勝利だったのではないかと私は考えています。

オバマ大統領の広島訪問を受け、大統領候補者だったトランプ氏は、ツイッターに「オバマ大統領は広島での演説で、パールハーバーでのアメリカ人の犠牲について触れなかった」と投稿しました。このとき日本の外交関係者は、トランプ氏の頭の中に「パールハーバー」の存在があることを察知したはずですが、

トランプ氏との友好的な関係構築は、日本政府にとって大きな課題でした。彼が大統領になるならば、そのわだかまりを解消しておかなければならない。そうした流れの中で、安倍首相の真珠湾訪問と献花は一つの手段と、外交関係者の中で見直されるようになったと思われます。ですから、もしヒラリー・クリントンが大統領に当選していたなら、安倍首相は真珠湾に行かなかったかもしれないと考えられることも可能です。

同時に、オバマ氏との最後の首脳会談を行うはずだった十一月のAPECで、正式な首脳会談をセットできなかったことも影響したと思います。米国務省は、この直前に安倍首相がトランプ次期大統領とニューヨークのトランプタワーで会談したことに激怒し、APECでは立ち話する時間しか取らなかったのです。

このままでは喧嘩別れのままオバ

マ大統領の退任を迎えてしまう。それはさすがにまずいと考えたのでしよう。安倍首相は約五分間の立ち話の中で真珠湾訪問を打診。そして十二月五日、訪問の正式発表に至ったのです。

中韓との和解のために

安倍首相はオバマ大統領とともに訪れた真珠湾で、こう演説しました。

「私がここパールハーバーで、オバマ大統領とともに、世界の人々に対して訴えたいもの。それは、この和解の力です。戦争の惨禍は、いまだ世界から消えない。憎悪が憎悪を招く連鎖は、なくなろうとしない。寛容の心、和解の力を、世界はいま、いまこそ必要としています」

私は、長年の訴えが実を結んだことに深い感慨を抱きながらも、この

演説に物足りなさを感じずにはいられませんでした。安倍首相が「和解の力」を強調しながら、中国や韓国といった東アジアの国々への言及が最後までなかったためです。

この三月、テキサスにコール氏を訪ねた際、彼は私にこう言いました。

「日本と中国はうまくいっていないのか」

じつはコール氏も、中国には特別な思いがあるのです。日本本土を空襲した後、中国本土に向かったドゥーリットル爆撃隊は、到着が深夜となったため、ウラジオストクに逃れた一機をのぞく十五機が上海付近での不時着や機体放棄で使用できなくなっていました。八十人の隊員のうち、三人が死亡、八人が日本軍の捕虜となり、三人が処刑されました。そんな中、落下傘で降下したコール氏は、中国人の住民の保護

や、近くにいたアメリカ人宣教師の助けもあって、日本軍の探索から生き延びたのです。

こうした縁から、コール氏は二〇〇五年に私との初対面を果たした後、対日戦とともに戦った仲間として中国に招かれ、大歓迎を受けたそうです。彼はこのときのことを振り返って、「日本は中国人にあまり好かれていないと感じた」と率直に語りました。

真の和解を必要としているのは日米間だけではない。中国や韓国といったアジア近隣諸国との間の棘のほうが、ずっと深く突き刺さっている——そのことを痛感した私は残りの人生を懸けて、中国・韓国との和解の実現に一役買いたいと決意したところでした。

*

サンアントニオでの滞在最終日、われわれはコール氏の自宅から車で

四十五分ほどのフレデリックスバーグへ向かいました。ここは、真珠湾攻撃の直後にルーズベルト大統領から太平洋艦隊司令長官に抜擢された海軍の最高指揮官チェスター・ニミッツ提督の生まれ故郷です。一九六六年の提督の死後、提督の祖父が建てたホテルが修復され、現在では「太平洋戦争博物館」として多くの見物客を集めています。

私はコール氏の乗る車椅子を押しながら、館内を見て歩きました。

ここにはB25の実物も展示されており、操縦席には人形が座っています。コール氏に「あのとき、窓は開けていたんですか？」と尋ねると、「そうだ」との答え。だからあのとき顔が見えたのだと、得心しました。

別れ際、われわれは「お互い長生きしよう」「また会おう」と言いながら、ハグを交わしました。